

Yamanashiken Nakakomagun Hattamura
山梨県中巨摩郡八田村

村内遺跡詳細分布調査報告書

2000

八田村教育委員会

Yamanashiken Nakakomagun Hattamura
山梨県中巨摩郡八田村

村内遺跡詳細分布調査報告書

2000

八田村教育委員会

序 文

八山村は山梨県甲府盆地の西部に位置しております。村の東側には釜無川が南流し、北側には御勅使川が流れ釜無川に注いでいます。二つの清流が合流する場所に村は発展してきました。御勅使川は古くから墨れ川として有名で、洪水になると多大な被害を村にもたらしてきました。八田村の歴史は、御勅使川の流れとともに織りなされてきたと言ってもいいでしょう。

このような墨れ川の作りだす扇状地には、古い遺跡がないと言われてきました。事実、調査以前に知られていた遺跡は数遺跡を数えるにすぎません。しかし、今回12人の調査員のご協力を得て村内全域にわたって調査を実施した結果、40を超える遺跡が発見されました。古い遺物としては縄文時代の後期の土器も採取されています。八田村に住んだ人々が、古くは縄文時代より日々の営みを続けてきたことが明らかとなったのです。

近年、中部横断道の建設や工場、宅地の開発など、さまざまな開発事業の波が八田村にも押し寄せております。村の発展には、現代の生活を支える住宅や道路などの整備が欠かせません。しかし、本当の意味での豊かな社会を築くには、文化的発展もまた必要となります。

地下に眠る遺跡は、郷土の歴史を伝える先人の遺産であり、村の文化的発展の基礎となるものです。埋蔵文化財を保護し、郷土の歴史を子供たちに伝えていくことが私たちの重要な務めなのではないでしょうか。村民の皆様が八田村の埋蔵文化財を理解し、埋蔵文化財の保護活用に本書が利用されることを心より願っております。

最後になりましたが、今回の調査に対し、ご指導ご協力をいただいた関係者の方々や村民の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成12年3月

八田村教育委員会

教育長 内田一雄

例　　言

- 1 本報告書は、山梨県中巨摩郡八田村の村内全域を対象とした遺跡詳細分布調査の報告書である。
- 2 分布調査は、平成11年度文化財保護事業として国、県の補助金を得て、八田村教育委員会が実施した。
- 3 調査期間は、平成11年11月12日から平成12年2月29日である。
- 4 遺跡範囲は、遺物の散布状況、地形、伝承、旧測量図、旧地籍図および発掘調査結果等を考慮し決定した。なお、堤防址については調査結果のほか、山梨県教育委員会発行の『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』を基礎資料とし、明治時代作成の地籍図および明治21年測量の地形図を合わせて考慮し決定した。
- 5 遺跡分布図における遺跡範囲は、堤防址を青線で、堤防址以外の遺跡を赤線で記載してある。
- 6 本報告書の執筆、編集は斎藤秀樹が行った。
- 7 写真撮影は遺跡ごとに割り当てられた担当者および斎藤が行った。
- 8 分布図作成および図版のトレースは小林素子、斎藤が担当した。
- 9 分布調査および本報告書に係わる図版、写真、遺物等の資料は八田村教育委員会が保管している。
- 10 調査から本書の作成に至るまで、次の諸氏、諸機関からご指導ご協力を賜った。記して心より感謝の意としたい。(敬称略)
山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、諏訪間伸、立花 実、保坂康夫

目 次

序 文
例 言
目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	4
第3章 調査の方法	6
第4章 調査の結果	6
1 遺跡の分布と概要	6
2 遺跡地名表	8
第5章 まとめと展望	11
引用・参考文献	12

挿図目次

第1図 八田村位置図	2
第2図 明治21年測量地形図と堤防址位置図	3
第3図 八田村の字界図	7
第4図 八田村地形図	13
第5図 八田村遺跡分布地図	15

表 目 次

第1表 八山村遺跡地名表.....	9
-------------------	---

写真図版目次

写真図版 1	1. 六科・村北遺跡	写真図版 5	1. 野牛島・西ノ神 (II) 遺跡
	2. 野牛島・立石上 (I) 遺跡		2. 野牛島・居村遺跡
	3. 野牛島・立石上 (II) 遺跡		3. 野牛島・家西遺跡
写真図版 2	1. 野牛島・西ノ久保遺跡	写真図版 6	1. 野牛島・下ノ川 (II) 遺跡
	2. 野牛島・小泉遺跡		2. 榎原・天神遺跡
	3. 赤山遺跡		3. 榎原・石丸 (I) 遺跡
写真図版 3	1. 赤山仲田遺跡	写真図版 7	1. 榎原・石丸 (II) 遺跡
	2. 野牛島・石橋遺跡		2. 舞台遺跡
	3. 野牛島・大塚遺跡		3. 坂ノ上姥神遺跡
写真図版 4	1. 野牛島・舞台遺跡	写真図版 8	1. 德永・村上遺跡
	2. 野牛島・立石下遺跡		2. 長盛院遺跡
	3. 野牛島・西ノ神 (I) 遺跡		3. 德永・御崎遺跡

第1章 調査に至る経緯と経過

近年まで、八田村は遺跡が少ない地域として考えられてきた。『山梨県遺跡地名表』(山梨県教育委員会・昭和54年)を見てみると、八田村の遺跡としては唯一、赤山遺跡あかやまいが登録されているにすぎない。いわゆる「遺跡の空白地」と考えられていたのである。こうした状況の背景には、八田村の立地環境が深くかかわっている。

八田村の大部分は御勅使川によって形成された扇状地と釜無川氾濫原上に位置している。八田村西半が御勅使川扇状地の扇尖部に立地するのに対し、村東半は釜無川の洪水によって形成された沖積低地となっている。扇状地を作り出した御勅使川は暴れ川として有名で、過去に幾度となく流路を変更し、近年まで洪水による多大な被害をおよぼしてきた。このような環境条件下では、古くから集落が営まれることは困難で、たとえ営まれたとしても洪水によって遺跡は流失しているものと考えられてきた。

考古学関係者をはじめ多くの人々が上記のような認識を持つ中、平成7年度に八田村野牛島のじまで行われた大塚遺跡の発掘調査によって、状況は変化の兆しをみせる。調査の結果、当初検出が予想されていた御勅使川の堤防跡は存在せず、古墳時代前期の集落址や奈良・平安時代の集落址等が発見されたのである。さらに中部横断自動車道建設に伴う試掘調査によって、仲田遺跡や石橋北岸敷遺跡、立石下遺跡など複数の遺跡の存在が明らかとなった。

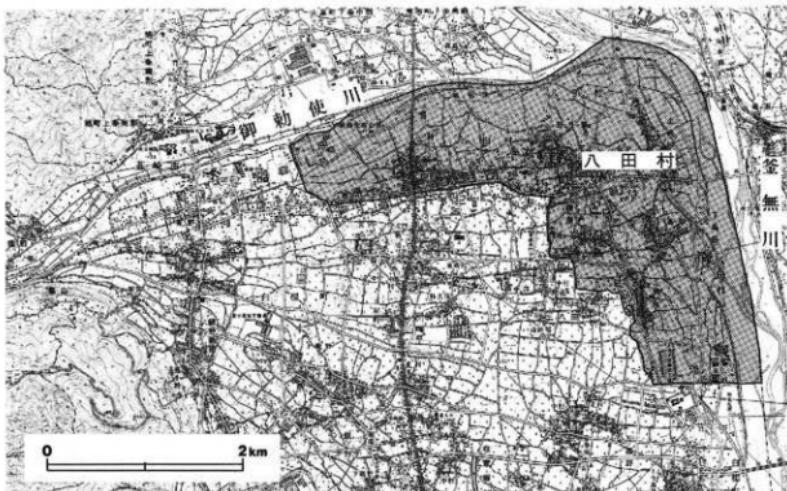
こうした近年の調査結果から、八田村にも多数の遺跡が埋没している可能性が考えられ、大規模開発等から埋蔵文化財を保護する必要性が緊急に生じてきた。このため八田村教育委員会は平成11年度の国庫補助金を得て、村内分布調査を実施することとした。

第2章 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

八田村は山梨県甲府盆地の西端に位置する(第1図)。北方には御勅使川が流れ、韮崎市および双葉町との境界となる一方、東方には釜無川が南流しており、竜王町、双葉町との境となっている。村の西方から南方にかけては白根町が隣接し、さらに西へ進むと南アルプスの玄関口である芦安村に至る。

御勅使川は唐松峠、ドノコヤ峠(1,700m)に源を発し、南アルプスの前衛の山々が織りなす河谷を急流する。やがて白根町有野付近(470m)で平地に入り、勾配をわずかにゆるめながら八田村の北を東流して釜無川に注ぐ。源流部山系の地質が軟弱なため、御勅使川の浸食作用が大きく働き、大量の砂礫が平地へと運ばれる。平地に入ると川幅は広がり、水深は浅くなつて



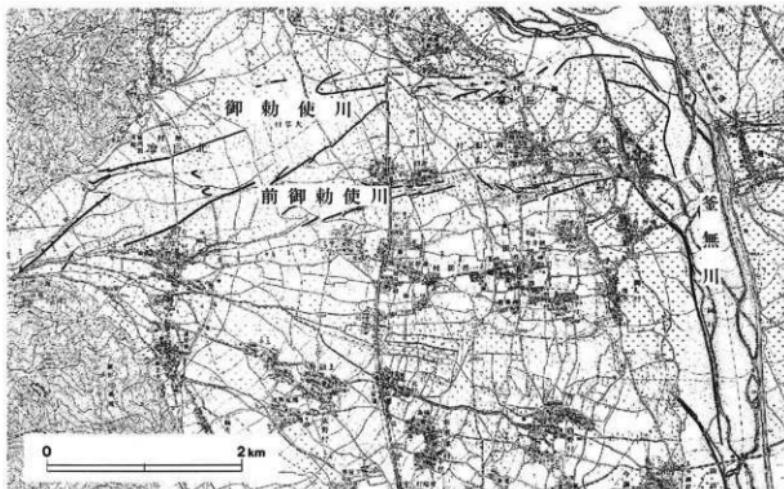
第1図 八田村位置図 (1/50,000)

流速も弱まるため、運搬しきれない砂礫が堆積することとなる。堆積が進むと河道付近が高くなり、より低地へと河道が転流する。このような変化が長い年月をかけて繰り返された結果、白根町塩前付近を要として半円錐形に広がる御勅使川扇状地が形成された。扇状地の総面積は40km²、海拔250~500mにわたり、全国でも有数の規模を誇る。

八田村は御勅使川扇状地の北部に立地している。村全体の地形は、扇状地の要である西方(380m)から扇端部となる東方(280m)へ傾斜している(第4図)。村西部は扇央部から扇端部に位置しているため、山から流れ出た水が地下に潜って伏流水となり、水の確保が困難な乾燥地帯を築きあげている。扇央にあたる地域は古くから「原方」と呼ばれ、乾燥した土地を利用して桑や木綿、たばこ等が栽培されてきた。近年では、桑畑からキウイやサクランボの果樹へと転作が進み、景観が大きく変化している。

八田村の東半は釜無川の沖積低地である。本米、御勅使川扇状地の扇端部となるべき村東部は釜無川の浸食を受けて削り取られ、高さ10~20mにもおよぶ浸食崖が造りだされている。このため伏流水となった地下水は崖下で地上に湧き出し、崖に沿って湧水帯が形成される。能藏池はこうした湧き水を源とする湧水池であり、神明川の水源となっている。一般に沖積低地は「田方」と呼ばれ、豊富な水の存在をうかがわせる地名のとおり、古くから水田耕作が広く行われてきた。

さらに細かく地形を見ていくと、現在の芦安竜王線は旧御勅使川の流路に相当していたと言われている。明治21年に作成された2万5千分の1の地形図では、現在の道路が河道として記



第2図 明治21年測量地形図と堤防址位置図 (1/50,000)
(国土地理院 大正5年発行 2万5千分の1 「韮崎」「小笠原」「甲府」「松嶋」に加筆)

載されており、少なくとも明治期まで川として機能していたことがわかる(第2図)。一般にこの流路は「前御勅使」と呼ばれ、県道沿いには南河原や前林など河原を想起させる小字名が残されている(第3図)。

前御勅使川の流路上では扇状地と沖積低地の境界となる崖線が見られない。前御勅使川の運ぶ堆積物によって浸食崖が埋積され、沖積低地にまで広がる二次的な扇状地が形成されているからである。一方、浸食崖をV字に削り込む小河谷の崖下にも二次扇状地が形成されている。支流によって崖が浸食されるのに対し、沖積低地には堆積物が埋積するためである。こうした小河谷は、崖線の発達した字居村や尾崎、舞台に見られ、現在では台地から低地へ下る道路として利用されている。

上述した扇状地や沖積低地のほかに、小規模ながら台地も存在する。韮崎から堀切橋を渡り御勅使川を越えて八田村にはいると、「赤山」と呼ばれる小高い丘の正面にたどり着く。今日では御勅使川によって二分されてはいるが、「赤山」は韮崎から続く龍岡台地の南端であり、本来一続きの台地であった。当然、御勅使川扇状地や釜無川氾濫源の地質とは異なり、八ヶ岳に由来する泥流が「赤山」の基盤となっている。

2 歴史的環境

八田村の中でこれまで知られていた遺跡は数少ない。縄文時代の遺物が採取されている赤山遺跡や平安時代の土器片が散布している舞台遺跡、前御勅使川沿いの堤防遺跡である。しかし、中部横断道路の建設や村道拡幅工事など近年の大規模開発に伴い、いくつかの新たな遺跡が発見され、発掘調査が行われた。以下、これらの調査成果をもとにして、時代ごとの概要を記述してゆきたい。

－縄文・弥生時代－

本村で確認されている縄文・弥生時代の遺跡はまだ数が少ない。その中で、龍岡台地の南端に位置する赤山遺跡は、縄文時代の石器や土器片が採取される遺跡として古くから知られている。また、赤山遺跡の西方で発見された大塚遺跡や石橋北屋敷遺跡では、縄文時代晚期終末の浮縫文土器が出上した。さらに、石橋北屋敷遺跡の南方約100mに位置する立石下遺跡からは、縄文時代晚期の土器片のはか、弥生時代の遺物が多数検出されている。このように遺物は発見されているものの、遺構が確認されておらず、いずれの遺跡も遺物散布地にとどまっている。しかし、徳永地域の徳永・御崎遺跡周辺では、縄文時代後期の土器片が多数表出できるなど集落址の存在をうかがわせる資料もある。今後の調査によって、扇状地上に縄文時代の集落址が発見されることが期待される。

－古墳時代－

古墳時代にはいると、八田村にも集落が存在したことが確認できる。大塚遺跡では、古墳時代前期の集落址が6軒検出され高壙や、S字状口縁台付甕等が多数出土した。集落は現御勅使川右岸に位置し、南北を谷に挟まれた尾根状の微高地に営まれている。榎原地域の榎原・天神遺跡でも畝状の溝跡から前期の台付甕片が発見された。遺構が調査区外の南と西方に続いていることから、榎原・天神遺跡の南西方向に古墳時代前期の遺跡が広がっている可能性が考えられる。

－奈良・平安時代－

近年の発掘調査によって最も多く発見され調査が行われたのは奈良・平安時代の遺跡である。特に野牛島地域での発見例が多く、大塚遺跡をはじめ東側に隣接する野牛島・大塚遺跡、石橋北屋敷遺跡、立石下遺跡で8世紀から9世紀の集落址が確認された。いずれの遺跡も扇状地の扇央部から扇端部付近に立地している。一方、前御勅使川を挟んで南方では、扇端部に位置する舞台遺跡周辺で平安時代の遺物が採取できる。また、榎原地区では榎原・天神遺跡の発掘調査が行われ、10世紀代の平安時代の集落址が検出された。このように前御勅使川を境として北側では8世紀から9世紀の住居址が多く検出されるのに対し、南側では10世紀代の住居址が中心となる。南側で検出された住居址が未だ少ないなど資料に偏りがあるが、大きな傾向として前御勅使川の南側に比べ、北側により早く集落が展開したと言えるだろう。

一中世

中世以降では、石橋北屋敷遺跡より鎌倉時代から室町時代の道路状遺構や溝遺構および戦国時代の区画溝等が検出されている。また、石橋北屋敷遺跡の北東の沖積低地上には、仲田遺跡が立地しており、発掘調査によって中世から近世までの水田跡が検出された。水田層は砂礫層を挟んで幾枚も確認されており、洪水の被害を受けながらも継続して水田耕作が行われていた様子がわかる。

発掘資料のほか、中世の八田村に関係する資料として梅形町高尾山穂見神社の御正体がある。鏡の銘には1233年の年代を示す「天福元年」の文字とともに、「甲斐國八田御牧北鷲尾」の文字が刻まれている。鎌倉時代に「八田の牧」と呼ばれる「牧」が存在した証拠として、この御正体は注目されてきた。「牧」とは、牛や馬を飼育した牧場を意味している。「八田の牧」は、当時の政府が管理する「勅使牧」ではなく、中世に入ると急増した民間が運営する「私牧」であったと考えられている。現段階では、「八田の牧」の正確な位置ははっきりしていないが、梅形町北部から白根町、そして八田村を含む一帯が推定地となっている。

江戸の終わりに完成した『甲斐国志』(文化11年、1814年編纂)によれば、戦国時代に御勅使川治水事業として、以下のような一連の治水工事が行われたという。それは御勅使川上流に「右石積出し」を設けて流れを北東に変え、白根町から八田村六科に「将棋頭」を作つて北と南に分流し、水勢を弱める。さらに龍岡台地の南端を開削して「堀切」を設け、現在の御勅使川の流路を作りだし、釜無川との合流地点に「十六石」をおいて、水流を対岸の「高岩」にぶつけるというものである。ほとんどの施設が未調査なため、こうした治水施設が全て戦国時代の所産であるかは不明である。さらに役割についても明確な結論がでていない。しかし、いずれにせよ前御勅使川に対する治水工事は、当時から生活に欠かすことのできない重要な事業であり、戦国時代、八田村に多数の治水施設が作られたことは間違いないだろう。

一近世から現代

江戸時代の八田村は現在の大字に相当する六科村、野牛島村、上高砂村、榎原村、徳永村、下高砂村の6村に分かれていた。明治にはいると町村制の以前に山梨県令が発令した合併布達を契機として、明治8年に六科村、野牛島村、上高砂村が合併して御影村が誕生し、同時に榎原村、徳永村、下高砂村が合併して田之岡村が成立した。終戦後の昭和31年、御影村と田之岡村が合併して八田村となり、現在に至っている。

註

- (注1) 1987年から1988年にかけて、「将棋頭」の発掘調査が白根町教育委員会によって行われ、南石堤部分が近世、北石堤部分が明治初期に比定された(宮沢他 1989)。しかし、初めて「将棋頭」が構築された時期は判明していない。

第3章 調査の方法

今回の分布調査は、八田全村を対象として調査を実施した。八田村を12調査区に分割し、各調査区ごとに調査員を割り当て、踏査による調査を行った。八田村は扇状地という地形条件もあって、地表面での遺物採取が困難である。そのため調査は調査区ごとに6日間にわたる詳細な踏査を実施した。

現地調査は周辺地形の観察および遺物の表面採取を行い、遺跡範囲を決定した。また、写真撮影と地図記載等による記録化を併せて行った。

本調査の調査員は次の通りである。(敬称略・順不同)

秋山圭子、大島正之、岡野秀典、小島利史、佐々木満、佐野 隆、高須秀樹、
田中大輔、広瀬和弘、皆川 洋、矢野晴代、山下大輔

第4章 調査の結果

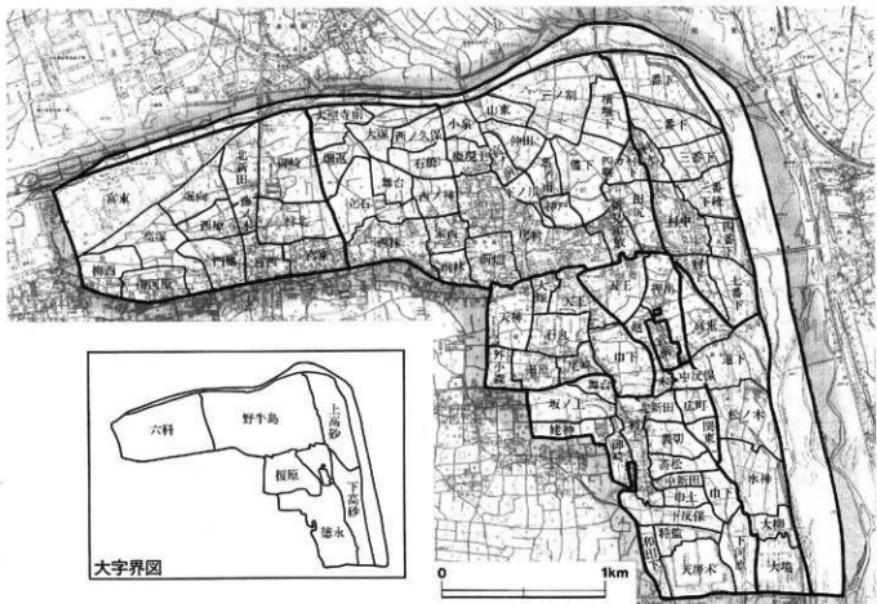
1 遺跡の分布と概要

本章では、今回の調査結果および試掘・本調査をもとに、八田村における遺跡の分布を立地環境の観点からまとめたい。

調査の結果、多数の遺跡が古扇状地上で発見された。すなわち、浸食崖を境として西側の扇状地に遺跡が集中して分布しているのである。なかでも野牛島地域と榎原・徳永地域には広範囲にわたって遺跡が確認されている(第3・4・5図)。

野牛島地域は、現御勅使川と前御勅使川との間に位置し、一時はその名が示すとおり島状となっていたと考えられる。宇石橋周辺を中心に、多くの遺跡が隣接して確認された。なかでも大塚遺跡や野牛島・大塚遺跡、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡では本格調査が行われ、奈良・平安時代の集落を中心として縄文時代晩期の遺物、古墳時代前期および中世の溝跡等が発見されている。一方、字居村周辺では野牛島・居村遺跡、野牛島・家西遺跡の2遺跡が主に確認された。現在居村は野牛島の集落の中心となっているため、遺跡範囲も狭く採取された遺物も近世のものと新しい。しかし、居村は水入手しやすい扇端部に立地していることや、鎌倉時代に曾我兄弟の仇討ちに関わり、この地に追放されたと伝えられる御所五郎丸の墓があることを考えると、中世以前から継続して居村に集落が営まれてきた可能性が強い。

榎原・徳永両地域は、前御勅使川を挟んで野牛島地域の南に位置している。調査が行われた榎原・天神遺跡では、平安時代10世紀の住居址や中世の柱穴等が検出された。遺跡は調査区外にも延びており、榎原・天神(II)遺跡と同一の遺跡である可能性が高い。浸食崖の崖上にあ



第3図 八田村の字界図 (1/30,000)

たる扇状地末端部では、舞台遺跡および坂ノ上姥神遺跡が確認された。扇状地では珍しく、両遺跡では広範囲にわたって平安時代の遺物を多数採取できる。舞台遺跡で行った試掘調査の結果、地表面から10~20cmという非常に浅い地点で、平安時代の遺構や遺物が確認された。遺構を確認する面が地表から浅い原因としては、扇状地末端部のため扇尖部と比べて御勅使川の運ぶ土砂の堆積が少なく、さらに風雨による浸食が影響したと推測される。同じく末端部に立地する徳永・御崎遺跡では、平安時代の遺物のほか、绳文時代後期の遺物が採取された。

上述した天神遺跡や舞台遺跡では、安定した褐色粘土層を基盤として遺跡が営まれている。^{註1)} 褐色粘土層の上に砂礫層はみられない。これらのことから、天神、舞台遺跡周辺が一定期間、御勅使川の主要流路でなかったと考えられる。また保坂康夫氏は、中部横断道に伴う試掘結果と明治時代の地形図を検討し、前御勅使川以前の古流路として白根町字北河原から八田村天房^{註2)}木にいたるルートを想定している。これらの状況からみて、樺原、徳永地域は前御勅使川と古流路の間に位置していると言えるだろう。

樺原地域の西方には百々遺跡が位置し、百件を超える平安時代の住居が発見された。百々遺跡では覆土に砂礫層が堆積し一部流路跡も見られるが、集落は褐色粘土層を基盤として営まれている。このことから、百々遺跡から舞台遺跡周辺の扇状地末端部を結ぶ地域では、御勅使川

による恒常的な影響が少なく、安定した褐色粘土層上に遺跡が広がっていると考えられる。もちろんこの主要流路間には、御勅使川の支流や洪水時の流路が網の目状に存在しているだろう。しかし、全体としては安定した地形を保持し、多数の遺跡が埋没していると推測される。

扇状地上で多くの遺跡が確認されたのに対し、沖積低地で新たに発見された遺跡は数少ない。これは前御勅使川の泥流と釜無川による氾濫によって、遺物がほとんど地表で採取できないためと考えられる。その中で、御勅使川右岸に位置する仲田遺跡では中世の遺物を伴う水田遺構が発見された。仲田遺跡が立地する地点は御勅使川による堆積のため顯著な浸食崖が見られず、扇状地から沖積低地へ続く緩斜面となっている。八田村北部の沖積低地上において中世以降の水田跡等の遺構が発見される可能性も考慮しておかなければならぬだろう。

八田村における遺跡分布の特徴として、考古学的立場から從来より注目されてきたのは、堤防址の存在である。八田村の堤防址は現御勅使、前御勅使、釜無川の3河川に伴うものに大きく分けることができる。御勅使川および前御勅使川沿いに築かれた堤防の多くは、「かすみ堤」と呼ばれる小規模で不連続の雁行堤である。釜無川沿いの堤防址も同じ形態をとるが、規模がやや大きい。これらの堤防址については調査例がほとんどないため、個々の時代や構造はわかつていない。今後の調査が待たれるところである。

註

(註1) 河西学氏は、中部横断道の試掘調査で採取された土壤サンプルのテフラ分析を行っている。分析の結果、褐色粘土層の形成時期は縄文時代晩期と推定されている(河西 1999)。

(註2) 保坂康夫 1999

2 遺跡地名表

- 1 遺跡番号は、八田村北西部から東へ任意に付した通し番号である。
- 2 遺跡名は、原則として所在地の大字と小字を組み合わせて決定した。その場合、大字と小字は「・」で区切ってある。同一の小字内に複数の遺跡が所在する場合は、遺跡名にローマ数字で番号を付与した。また、遺跡が複数の小字にまたがる場合は、所在の中心となる二つの小字を併用した。既名の遺跡については、できる限りそのままの名称を採用している。そのほか、遺跡の所在地に歴史的名称がある場合は、その名称を遺跡名とした。
- 3 堤防址については、現御勅使川と前御勅使川そして釜無川に伴うものの3つに区分し、それぞれに一括して遺跡番号および遺跡名を与えた。
- 4 所在地は、遺跡の立地する中心番地を代表地番として記入した。
- 5 備考欄には、県遺跡番号、調査例、出土遺物等を記入した。県番号は昭和54年発行の遺跡地名表によった。調査例の「県」は山梨県埋蔵文化財センター、「村」は八田村教育委員会の略である。また、Hは平成を意味する。

第1表 八田村遺跡地名表

No.	遺 跡 名	種 別	時 期	所 在 地	備 考
1	六科・堀向（Ⅰ）遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	六科753他	
2	六科・堀向（Ⅱ）遺跡	散布地	中世・近世	六科745-1他	
3	六科・北新田遺跡	散布地	平安・中世・近世	六科544他	
4	六科・高塚遺跡	古墳？	古墳？	六科925-2他	
5	六科・みゆくし 六科・宮西遺跡	散布地	近世	六科1497他	
6	六科・わたり 六科・村北遺跡	散布地	縄文・中世	六科47-1他	
7	六科・みゆくし 六科・御峰遺跡	散布地	中世・近世	六科191他	
8	野牛島・立石上（Ⅰ）遺跡	散布地	中世・近世	野牛島2537他	
9	野牛島・立石上（Ⅱ）遺跡	散布地	平安・中世	野牛島2483他	
10	大塚遺跡	集落	縄文・古墳・奈良・平安	野牛島3173-1他	H 7県調査
11	野牛島・西ノ久保遺跡	散布地	平安	野牛島2995他	
12	野牛島・小泉遺跡	散布地	平安	野牛島2813他	
13	堀切遺跡	治水施設	中世・近世	野牛島2825他	
14	赤山遺跡	散布地	縄文	野牛島2821他	黒No.38-1 縄文時代の遺物出土
15	赤山仲田遺跡	水田	中世・近世	野牛島788他	H 11村試掘
16	仲田遺跡	水田	中世・近世	野牛島2804他	H 11県調査
17	石橋北屋敷遺跡	集落	縄文・古墳～中世	野牛島2744他	H 9・10県調査
18	野牛島・石橋遺跡	散布地	平安	野牛島3031他	
19	野牛島・大塚遺跡	集落	奈良・平安	野牛島3047-3他	H 11村調査
20	野牛島・舞台遺跡	散布地	平安・中世	野牛島3080他	
21	立石下遺跡	集落	縄文～中世	野牛島2580他	H 11県調査
22	野牛島・立石下遺跡	散布地	平安・中世	野牛島2594-1他	
23	野牛島・西ノ神（Ⅰ）遺跡	散布地	中世・近世	野牛島2656-1他	
24	野牛島・西ノ神（Ⅱ）遺跡	古墳？	古墳？	野牛島2616	
25	野牛島・尻居遺跡	散布地	近世	野牛島2114他	

No.	遺跡名	種別	時期	所在地	備考
26	野牛島・家西遺跡	散布地	中世・近世	野牛島2148他	
27	御所五郎丸の墓	墓地	中世	野牛島2076	
28	野牛島・下ノ川（Ⅰ）遺跡	散布地		野牛島96他	
29	野牛島・下ノ川（Ⅱ）遺跡	散布地		野牛島132他	
30	上高砂・村中遺跡	散布地	近世	上高砂982他	
31	櫻原・天神遺跡	集落	古墳・平安	櫻原800他	
32	櫻原・天神（Ⅱ）遺跡	散布地	平安	櫻原555他	
33	櫻原・天神（Ⅲ）遺跡	散布地	平安・中世	櫻原856-1他	
34	櫻原・南原遺跡	散布地	平安・中世	櫻原505他	
35	長谷寺遺跡	散布地	平安・中世・近世	櫻原440-1他	
36	櫻原・石丸（Ⅰ）遺跡	散布地	中世・近世	櫻原586	
37	櫻原・石丸（Ⅱ）遺跡	散布地	平安・中世・近世	櫻原595	
38	櫻原・石丸（Ⅲ）遺跡	散布地	中世・近世	櫻原660他	
39	舞台遺跡	集落	平安	徳永1921他	H11村試掘
40	坂ノ上熊神遺跡	散布地	平安	徳永1845他	
41	徳永・村上遺跡	散布地	平安	徳永1976他	
42	長盛院遺跡	散布地	中世・近世	徳永1678他	
43	徳永・御崎遺跡	散布地	縄文・平安	徳永1666他	
44	一基下堤跡	堤防	近世	上高砂1378他	H10県調査
45	御勤使川堤防址群	堤防	中世・近世		
46	前御勤使川堤防址群	堤防	中世・近世		
47	益無川堤防址群	堤防	中世・近世		

第5章　まとめと展望

分布調査の結果、新たに40以上の遺跡が確認された。既知の遺跡を含めると、合計47の遺跡が発見されたこととなる。八田村では、縄文時代から現代まで、^{はんめん}連綿と人々の営みが続けられてきたことが明らかとなった。

分布調査は、地表の遺物を採取し遺跡範囲を決定する方法をとる。そのため、宅地や水田では遺物の採取が難しく、また扇状地や沖積低地の場合、遺物の露頭している場所は限られるため、表面採集による遺跡の確認には眼界があった。特に村東部の沖積低地には釜無川と御勅使川、両河川の運ぶ土砂が厚く堆積し、扇状地に比べ表面に露出する遺物が極端に少ないので実状である。前章で述べたように、扇状地に遺跡が多く沖積低地に遺跡が少ないという結果は、本米の遺跡分布に偏りがあることに加え、遺物の採取しやすさの違いを反映しているとも言えるだろう。つまり沖積低地、扇状地とともに、未発見の遺跡が数多く埋没している可能性は高いと考えられる。

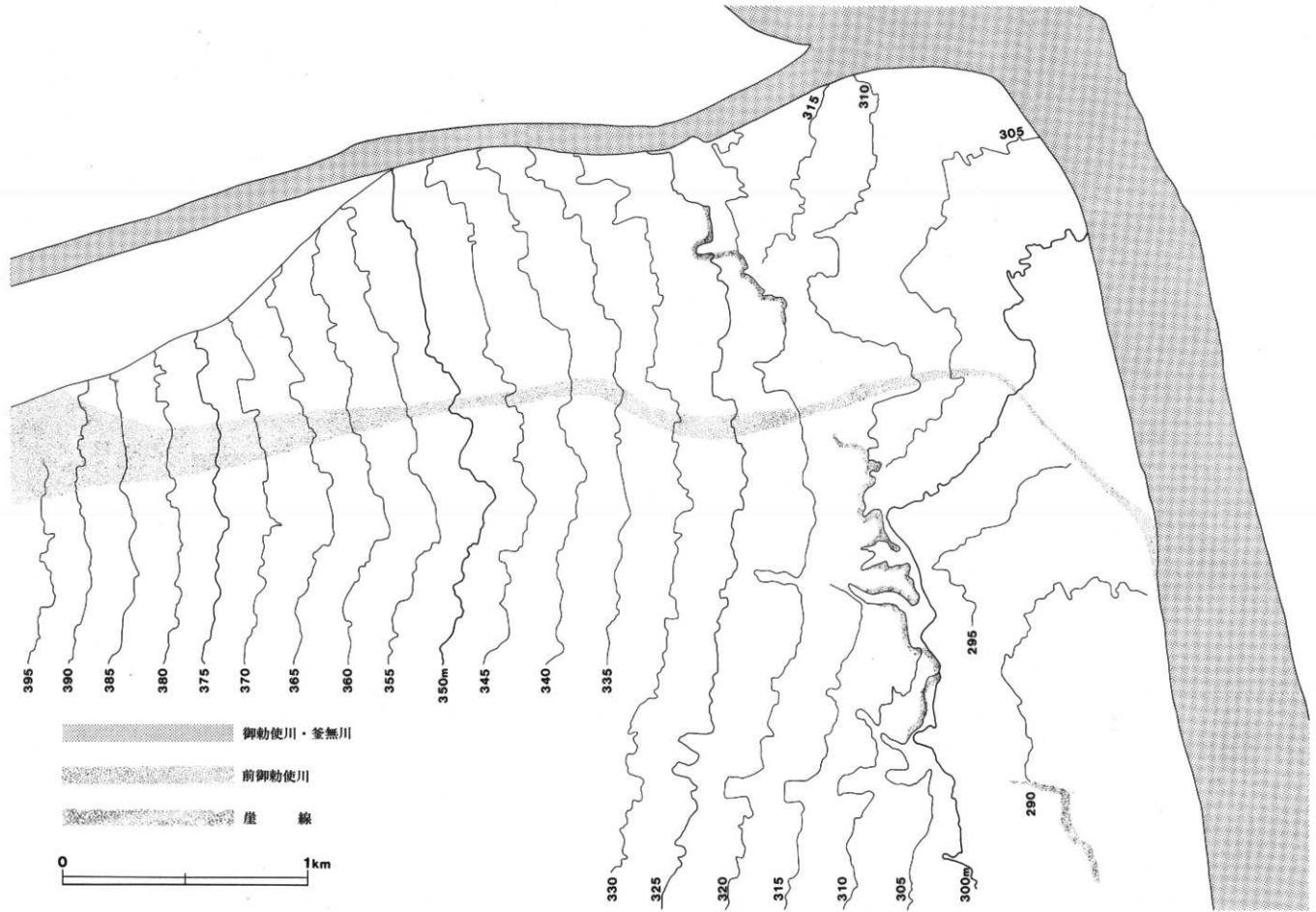
こうした調査課題はあるものの、調査以前に確認されていた遺跡が数遺跡にすぎなかったことを考えれば、今回の調査成果は非常に大きいと言える。今後は、試掘調査および立ち会い調査等により、遺跡分布図の充実を図っていく必要がある。

道路や下水道整備など各種開発事業は、現在の生活を豊かにするうえで欠くことのできないものです。しかし、その影で永久に失われていく埋蔵文化財が多数あることにも注意しなければなりません。今回の調査によって、八田村の歴史は大きく変わりました。我々の予想を超えて、八田村にも多数の遺跡が埋没していることが判明したのです。遺跡が増えることは、郷土に新たな歴史が加わることにはかなりません。ひとつひとつの埋蔵文化財を大切に扱うことが、八田村の新たな歴史を築くことに繋がっています。八田村を包む豊かな「自然環境」とともに、「歴史的環境」を整え、子供達に伝えていくことは現在に生きる我々の責務であると言えましょう。今回の調査結果が、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整、および八田村のみならず山梨県の歴史研究資料として活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査から報告書作成まで様々な方にご指導、ご協力をいただきました。心より感謝し御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 秋山 敬 1998 「川除普請の労働力—甲斐国を中心にして—」『治水・利水遺跡を考える一人は水とどのようにつづきあってきたか—』第II分冊 第7回東日本埋蔵文化財研究会
- 河西 学 1999 「中部横断道試掘調査のテフラ分析」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 齊藤享治 1998 「日本の扇状地」 古今書院
- 笹本正治 1998 「信玄堤の再評価をめぐって」『治水・利水遺跡を考える一人は水とどのようにつづきあってきたか—』第II分冊 第7回東日本埋蔵文化財研究会
- 白根町誌編纂委員会 1969 『白根町誌』 白根町
- 高木勇夫 1985 『条理地域の自然環境』 古今書院
- 高木勇夫・中山正民 1983 「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』第18号
- 1987 「微地形分析よりみた甲府盆地における扇状地の形成過程」『東北地理』39
- 田中大輔 1997 『昭和町かすみ堤』 昭和町教育委員会
- 1998 「かすみ堤にみる近世築堤法」『治水・利水遺跡を考える一人は水とどのようにつづきあってきたか—』第II分冊 第7回東日本埋蔵文化財研究会
- 新津 健 1997 『大塚遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集 山梨県教育委員会他
- 1999 「縄文晩期後半遺跡分布の意味と課題—山梨県における遺跡の継続性と立地から—」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 畠 大介 1988 「竪岡将棋頭について」 『武田氏研究』2号
- 1998 「発掘調査された河川と池の堤防—その概観と課題—」『治水・利水遺跡を考える一人は水とどのようにつづきあってきたか—』第II分冊 第7回東日本埋蔵文化財研究会
- 畠 大介他 1998 『山梨県堤防・河岸遺跡分布調査報告書』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第152集 山梨県教育委員会
- 八田村誌編集委員会 1972 『八田村誌』 八田村
- 保坂康夫 1999 「御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地—中部横断道の試掘調査の成果から—」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 宮沢公雄他 1989 「将棋頭遺跡・須沢城址」 白根町教育委員会
- 山梨県教育委員会 1979 『山梨県遺跡地名表』
- 雄山閣 1968 『甲斐国志』



第4図 八田村地形図 (1/15,000)

写 真 図 版

写真図版 1

六科・村北遺跡 (No. 6)



野牛島・立石上 (I) 遺跡
(No. 8)



野牛島・立石上 (II) 遺跡
(No. 9)



写真図版 2



野牛島・西ノ久保遺跡
(No.11)



野牛島・小泉遺跡 (No.12)



赤山遺跡 (No.14)

写真図版 3



赤山仲田遺跡（No.15）



野牛島・石橋遺跡（No.18）



野牛島・大塚遺跡（No.19）

写真図版 4



野牛島・舞台遺跡（No.20）



野牛島・立石下遺跡（No.22）



野牛島・西ノ神（I）遺跡
(No.23)

写真図版 5



野牛島・西ノ神（II）遺跡
(No.24)



野牛島・居村遺跡 (No.25)



野牛島・家西遺跡 (No.26)

写真図版 6



野牛島・下ノ川（II）遺跡
(No.29)



櫻原・天神遺跡 (No.31)



櫻原・石丸（I）遺跡 (No.36)

写真図版 7



櫻原・石丸(II)遺跡 (No.37)



舞台遺跡 (No.39)



坂ノ上姥神遺跡 (No.40)

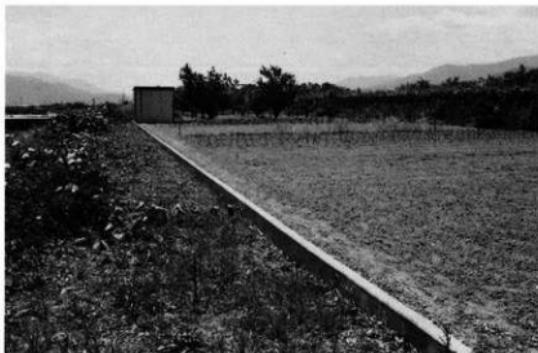
写真図版 8



徳永・村上遺跡 (No.41)



長盛院遺跡 (No.42)



徳永・御崎遺跡 (No.43)

八田村文化財調査報告書 第1集
山梨県中巨摩郡八田村
村内遺跡詳細分布調査報告書

発行日 平成12年3月31日
編集／発行 八田村教育委員会
〒400-0205 中巨摩郡八田村野牛島1946-1
TEL 055-285-1883
FAX 055-285-0491
印刷所 鬼灯書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
TEL 026-244-0235
FAX 026-244-0210

